

菊慈童

長唄

全詞章

本名題「乱菊枕慈童」

能「菊慈童」に取材

資料の題名『乱菊枕慈童』

峰の初花谷の月、七百年も昨日今日、名をも彭祖と呼子鳥、覚束なくも唯一人、都の空を恋衣、夜半の嵐に梳り、旦の雨に髪洗ふ、木の葉衣の綾錦、われから染むる秋の色

菊の一夜の夢に咲く、思ひ出づるも恥かしや、実に古は宮中にて、錦の褥玉の床、君が情の言の葉に、露の契を重ね菊、いとし可愛も妹と背の、恋にも遙か十寸鏡

おろの妻恋ふ山鳥の、仇な仮寐もつれなきを、末白菊の玉かづら、人目の関は越えもせで、枕の科や乱れ髪

今は深山に世を捨て菊の、雁のはつかの便も絶えて、菊の葉末に書く文字の、筆の命毛切れ果てもせず、汲むや流の菊の酒、あいもおさへもひととと菊の

禿菊とはませ垣の、ませたなりふり川竹の縁に引かるる名も可愛らし

恋の命は初時鳥

月の影さへ空懐かしき

二度のあふ瀬は時雨の紅葉

見れば其のまま顔に火が

高いも

低いも色の道

後は互に言ふことさへも、袖にわかるる留木の薫

君と我とは飛び交ふ蝶の、二つ連れたる比翼の車、ちらりちらりちらりちらり

袖や袂に

春ならで、胡蝶の夢か幻か

風に翼の白粉も、乱れ乱れて糸の纏れや思の絆

花にあこがれ月に浮れて、待つに来ぬ夜は氷の地獄に、せめられ身をきる剣はあだに、明ゆく八声の鳥鐘、火中の炎に苦しみて

くるりくるくる日影の小車、われのみ物や思ひ顔

思へば昔し懐かしや、初春霞秋の風、四季物狂ひと人や問ふ、人の眺も

袖にそよそよ吹く風を、恋風と思はんせ、オオそれぞれそれ誠まこと

心も曇る胸の闇、かんならずエエ月の夜に、御座んせつまがへさん、つまがへさんつまがへさん恋風と思はんせ、オオそれぞれそれ誠まこと

かさで逢ふ夜はナア、月の雲も面憎いとし、しんきな顔見たや、いとししんきのなん

情のそれが誠に、てんと誓文わが思

それが浮名のナ立つとても、こちや嬉し

いとししんきの顔見たや、いとししんきのなんなん情の、露や時雨やてんと誓文我が匂ひ、それが浮名の立つともこちや嬉し、散らぬ姿の乙女菊

もとより薬の酒なれば、酔にも犯されず、その身も変らぬ七百余才を保ちぬるも、この御枕の故なれば、いかにも久しき菊の水、汲めや汲め汲め尽せじと、菊かき分けて山路の仙家にそのまま

慈童は帰りけり